

体育会学生における社会人基礎力に関する分析
～小樽商科大学の大学生を対象とした体育会と
サークルの比較分析～

学籍番号 2014469

氏名 田中慶一

提出年度 平成 29 年度

目次

1 章 はじめに	2
1-1 小樽商科大学のサークル活動	2
1-2 問題意識.....	2
2 章 先行研究	3
2-1 社会人基礎力	3
2-2 課外活動と社会人基礎力の関係	3
2-3 態度.....	4
3 章 目的と検証プロセス	5
3-1 目的.....	5
3-2 検証プロセス	5
4 章 調査方法	6
4-1 アンケート用紙の作成	6
4-2 アンケート方法	6
5 章 分析結果	7
5-1 検証Ⅰ:クラスタ分析	7
5-2 検証Ⅱ:クラスタごとの社会人基礎力に関する分散分析	8
5-3 運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力に関する分散分析.....	10
5-4 検証Ⅲ:同じクラスタにおける分散分析.....	10
6 章 考察	14
7 章 本研究のまとめ	16
7-1 理論的貢献.....	16
7-2 実務的貢献.....	16
7-3 本研究の限界と発展	18
7-4 謝辞.....	18
参考文献.....	19

1 章 はじめに

1-1 小樽商科大学のサークル活動

小樽商科大学の学生のサークル活動の加入率は 83%と、大多数の人が何らかのサークルに入っている。また、クラスのない小樽商科大学の学生にとって、サークル活動は多くの時間を過ごす課外活動である。このように小樽商科大学におけるサークル活動は、日常生活と密着に関わり、様々な能力の成長の場となっている。もちろん、専門の知識に関しては講義等で学ぶことができる。その一方、今後社会に出ていくうえで役立つ能力に関しては、サークル活動やその他の課外活動で養われていると考えられる。事実、就職活動の面接では、サークル活動について聞かれることが多い。以上より、小樽商科大学の学生にとってサークル活動は大きなウエイトを占め、そして成長に大きな影響を与えていると考えられる。

1-2 問題意識

一つ目の問題意識は、学生と企業の採用者において、サークル活動における社会人基礎力の育成について思い込みがあると考えられることである。今回の思い込みとはつまり、主将をやっている人はリーダーシップ能力が高い、運動部はストレス耐性が強い、などといったものである。私は、運動部所属であるが、採用面接時に副将でレギュラーであったと伝えることで、協調性やリーダーシップなど一定の能力があると判断され、優遇されていると感じた。しかし、「どのようなサークル活動の中で」「どのような関わり方をしている人が」、「実際にどのような能力が伸びるか」については明らかにされていない。本研究ではその点を明らかにすることで、採用活動の一助となることを目的としている。

二つ目の問題意識は、課外活動に対する学校側の評価が低いことである。これは茂里（2000）の論文で述べられている。この事象は、茂里（2000）によると、課外活動によってどの程度能力が伸びるかが明らかにされていないために起こっていると想定されている。これも本研究で明らかにすることで、大学側の認識を改めてたいと考えている。

三つ目の問題意識は、これまでの研究で課外活動と「能力の伸び」に関しては様々に述べられているが、どの研究もサークル活動を一緒に語っているという点である。つまり、サークル活動を、「運動部」「文化系サークル」「運動系サークル」と分けずに「能力の伸び」について言及しているということである。私は、上記の 3 者において身につく能力は異なると思う。ではなぜ、これまでの論文はサークルを一緒に語っているかというと、その研究が課外活動を「アルバイト」「ゼミ活動」「ボランティア活動」「サークル活動」と分類し、その項目間の能力の伸びを比較したものとなっているからである。しかし、小樽商科大学において、「運動部」「文化系サークル」「運動系サークル」間において身につく能力の差は大きいと考えられるので、研究する価値が十分に高いと想定される。

2章 先行研究

2-1 社会人基礎力

サークル活動と能力の伸びの関係性を調べるうえで、以下の項目について先行研究のレビューを行う必要がある。一つ目は、能力の定義である。二つ目は、サークル活動を含めた課外活動と能力の伸びとの関連性に関する研究についてである。三つめは、サークルに対する関わり方についてである。同じサークルにおいても関わり方によって伸びる能力は違うと考えられるためレビューをする必要がある。この節では能力の定義について触れる。

「大学生は、主として学生としての役割を担いながら、school to school の移行を経て school to work という移行を課題とする発達段階にある」（三保・清水，2012；三保・清水，2011）。「学生としての役割から労働者としての役割にその重要性がシフトする school to work という移行においては、学生としての役割が機能する正課教育のみならず、その他の役割が機能している正課外活動を通じた経験が、汎用的技能の獲得という点において寄与している」（豊田，2011）。このように、大学生活は社会に出るための準備期間であり、それは正課教育とともに、課外活動を通じて行われるものであると論じられている。

「ただし近年、社会生活の中でこのような社会に出ていくうえで必要となる能力を身につける仕組みの働きが相対的に低下してきたことがある」（西道，2011）。「また、これまで職場や地域社会で活躍するために必要な能力は、大人になる過程で『自然に』身につくものと考えられており、明確な定義は与えられてこなかった」（経済産業省，2006）。以上の状況を踏まえ、経済産業省は2006年に開かれた社会人基礎力に関する研究会において「社会人基礎力」という概念を打ち出した。本研究では、能力について社会人基礎力を採用する。

社会人基礎力について、2009年に西道が提案した、社会人基礎力の測定尺度15項目を本研究では採用する。西道は、「経済産業省が提案する『社会人基礎力』の概念的定義を整理し、独自調査で収集した基礎力を精査して加え、測定対象とすべき指標の整理を行っている。」15の能力とは—1）主体性、2）働きかけ力、3）実行力、4）課題発見力、5）計画力、6）創造力、7）発信力、8）傾聴力、9）柔軟性、10）状況把握力、11）規律性、12）プレゼンテーション力、13）説得力、14）職業理解力、15）情報収集力—である（西道，2011）。ただし、「課題発見力」と「傾聴力」については尺度の妥当性が十分ではなかったため、本研究ではそれらを抜いた13項目の社会人基礎力で分析をする。

2-2 課外活動と社会人基礎力の関係

課外活動が、人間的な成長を促すということは数々の論文で述べられている。「青少年の人的成長を促すには、教室での正課教育だけでは不十分であり、課外活動をはじめとした正課外教育の重要性が高い」（日本私立大学連盟，2007）。「忍耐力，意思伝達力，折衝力，協調性，決断力，適応力，行動力，リーダーシップなどの『人間基礎力』を育成する場とし

て課外活動が格好の場である」(茂里, 2000)。ただし、茂里(2000)の論文より、課外活動に対する大学側の評価が高いわけではなく、これは課外活動によってどの程度能力が伸びるのかがわかっていないことが原因であると指摘されている。

次に、サークル活動と社会性に関しては、サークルに加入することで、学業との両立や友人の種類などの大学生活が、非加入者と比べて質的に異なってくることや、サークル経験が人間関係・専門性の成長や社会性の獲得のために役立つと考えられていると論じられている(新井, 2003)。また、「体育会の学生は、一般にふつうの人より体力があり、団体競技を通じての協調性もある、と企業から見なされる」(橘木, 2012)。このように、運動部は他に比べて能力が高いとみられ、採用時に有利に働くことがあると述べられている。

また、大学生活と社会人基礎力の関連については、大学生活に関する項目について因子分析を行い、「学内活動(3項目)」、「就職活動(2項目)」、アルバイトを含む「自己志向活動(3項目)」の3因子に分類し、その3因子と社会人基礎力の関係性について分析する調査はすでに存在している(向居, 2013)。しかし、サークル活動と社会人基礎力の関係については触れられていない。また、(1)講義や学内での勉強、(2)資格取得など自己研鑽、(3)学内のクラブ、サークル活動、(4)学外組織での活動(アルバイトを除く)、(5)アルバイト、(6)旅行など見聞を広める活動、(7)就職活動、(8)趣味に関する活動の8項目に分け、これらの活動と社会人基礎力との関連を分析した研究も存在する(三保・清水, 2013)。しかし、サークル活動の細分化がなされていないことに加え、次節で述べられる「サークルへの態度」の視点がないことが課題であると考えられる。

2-3 態度

サークル集団との関わり方は、社会人基礎力の伸びを考えるうえで、非常に重要であると考えられる。ここで高田(2014)の論文において、大学生のサークル集団との関わり方について深く述べられている。また、その論文で高田は、大学生のサークルへの関わり方を「サークルへの態度」と定義している。その論文では、大学生24名を対象として調査を行い、サークルへの態度についての分類を試みている。以下がその結果である。

表1) 先行研究のクラスタ分析

クラスタ1	集団への愛着
クラスタ2	集団への義務と責任
クラスタ3	集団への我慢と受容
クラスタ4	集団への傍観と協調
クラスタ5	集団への消極的関与
クラスタ6	集団への不快感

以上より、サークルへの態度については、6つのグループに分類されている。しかし、各クラスタの人数が3~4名となっており、信ぴょう性が薄い。よって、本研究で小樽商科大学の学生を対象として再調査をする必要があると考えられる。

3 章 目的と検証プロセス

3-1 目的

先行研究のレビューより、サークル活動と社会人基礎力の関係を分析するうえで、サークル活動を一括りに語っていたことが明らかになった。しかし、社会人基礎力の伸びを考えるうえで、運動部、文化系サークル、運動系サークルを分類せずに考えるのは問題である。なぜならば、橘木（2012）の書籍で述べられているように、採用担当者や世間の人が、運動部の人間の方が一般に能力が高いと思っている事実があるからである。よって、サークル活動による社会人基礎力の伸びを考えるうえでは、運動部、文化系サークル、運動系サークルを別個に考える必要がある。もし、運動部の社会人基礎力サークルの伸びが高くないという結果が得られると、定説を覆すことになる。

また先行研究では、サークル活動と社会人基礎力活動の関係性を分析するうえで、「サークルへの態度」を考慮していなかった。これでは、リーダーもフォロワーも成長に関して同様に語られることになってしまい大いに問題である。

よって、これらの先行研究の問題点を踏まえ、以下の3点を本研究の目的とする。

- ① サークル活動への態度を分類する。
- ② 分類された態度（クラスタ）ごとの、社会人基礎力の伸びの差を明らかにする。
- ③ 同じ態度（一つのクラスタ内）における、運動部、文化系サークル、運動系サークル間の社会人基礎力の伸びの差を明らかにする。また、その差が生まれる理由を明らかにする。

特に、目的③は「サークルへの態度」と「サークル活動の様態」を掛け合わせたもので、従来のサークル活動と社会人基礎力（社会性）の関係性の分析では全くなかった視点となっている。また、「サークルへの態度」を考慮しない単純な運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力の伸びの差についても分散分析をおこない明らかにする。

3-2 検証プロセス

本研究では、第3章1節で述べた目的を達成するために、3つの検証をおこない分析とする。また、それぞれの検証において事前に仮説を立て、仮説検証型の研究をおこなう。

検証Ⅰ：クラスタ分析。

検証Ⅱ：クラスタごとの社会人基礎力の伸びに関する分散分析。

検証Ⅲ：クラスタ内における、運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力の伸びに関する分散分析。

本研究では、上記の3ステップで分析を進める。また、本研究の核となる検証Ⅲにおいては、分散分析の結果の根拠を明示するために、定性調査を実施する。

4章 調査方法

4-1 アンケート用紙の作成

アンケート用紙は、「回答者の属性」、「回答者にとって最も重要なサークル活動に関する態度の測定」「回答者がその集団に入ったことで培われた社会人基礎力の伸びの測定」の3つの質問グループで構成でした。回答者の属性については「学年」「性別」「学科」「サークル活動の様態（運動部、文化系サークル、運動系サークル、その他）」「サークル活動の活動頻度」「サークル活動における役職」の6項目について設けた。なお、先行研究で意見が分かっているダンスサークルについては、翔楽舞は文化系サークル、アクセルは運動系サークルとした。これは小樽商科大学の学務課の区分に従ったものである。つぎに、文化系サークルと運動系サークルサークル活動への態度の分類については、先行研究（高田，2014）に掲載されている尺度に加え、一部オリジナルの尺度を設け71項目を作成した。また、社会人基礎力については、（西道 2011）に掲載されている尺度を参考に42項目を作成。計119項目のアンケートとなった。なお、回答者の属性以外は7段階評価で答える形式となっている。質問項目の数が多いため、インターネット上ではなく、紙媒体でアンケートを実施した（補足資料として添付）。

4-2 アンケート方法

小樽商科大学の大学生を対象に2017年10月～11月にアンケート調査を実施した。講義の受講生、サークル団体、ゼミナールを中心に226の有効回答を得ることができた。内訳は、運動部117名、文化系サークル58名、運動系サークル39名である。なお、本研究では使用しなかったが、無所属の人12名からも回答を得ることができた。私が運動部に所属していたこともあり、本研究では運動部のサンプルが多い結果となった。これは今後研究の課題の一つになると考えられる。

表2）学年、性別、所属学科の内訳。（人）

	一年	二年	三年	四年	その他
学年	15	20	96	95	0
	男	女			
性別	78	52			
	経済学科	商学科	企業法学科	社会情報学科	未定
所属学科	26	41	27	21	15

なお、所属学科と性別については初期に行ったアンケート項目には含まれておらず、途中からの追加項目となっているためにサンプル数が少なくなっている。

5章 分析結果

5-1 検証Ⅰ: クラスタ分析

【仮説】

・小樽商科大学において、クラスタは、所属する団体に対してポジティブな関わり方をするクラスタと、消極的な関わり方をするクラスタに分かれる。また、そのクラスタの割合は、運動部よりサークル団体の方が、ポジティブな関わり方をしている人の割合が高い。

【結果】

アンケート調査より集計された、何かしらのサークル活動に所属している 214 名のデータについてクラスタ分析を行った。第 4 章 1 節で述べたように、「サークルへの態度」についてクラスタ分析をするために、あなたが所属する最も重要なサークル集団についてどのように感じているか、どのように関わっているか、について 71 項目のアンケート項目を設け、7 段階評価で回答を得ている。なお本分析の目的は、先行研究において十分なサンプルが確保できていないこと、小樽商科大学の学生におけるサークルへの態度を明らかにする、分散分析を行うため、の 3 つである。以下がクラスタ分析の結果である。

表 3) クラスタ分析の結果

クラスタ名	クラスタの特徴
集団への愛着	満足度が高い、活動が楽しみ、メンバーと仲がいい
集団への責任と義務	集団をよくする責任がある、率先して行動
集団への我慢と諦め	うわべだけで関わる、諦めている
集団への嫌悪	価値観の違いを感じる、縛られることが嫌

分析の結果、「サークルへの態度」はポジティブな関わり方である「集団への愛着」、「集団への責任と義務」とネガティブな関わり方である「集団への我慢と諦め」、「集団への嫌悪」の 4 つに分類することができた。クラスタの特徴については、アンケート 71 項目の質問に対するクラスタごとの平均点を求め、平均点が他のクラスタと比較して特に高いものを掲載した。

表 4) 各クラスタにおける運動部、文化系サークル、運動系サークルの内訳（人）

	運動部	文化系サークル	運動系サークル
集団への愛着	43	19	11
集団への責任と行動	23	13	10
集団への我慢と諦め	21	10	7
集団への嫌悪	30	16	10

【仮説の検証】

仮説の通り、小樽商科大学におけるサークルへの態度は、ポジティブな関わり方をするクラスタ2つと、ネガティブな関わり方をするクラスタ2つに分かれた。

表5) ポジティブな関わり方のクラスタとネガティブな関わり方のクラスタの割合

	運動部	文化系サークル	運動系サークル
ポジティブな関わり方の人の割合	56.4%	55.2%	55.3%
ネガティブな関わり方の人の割合	43.6%	44.8%	44.7%

仮説とは異なり、運動部、文化系サークル、運動系サークルを比較したときに、ポジティブな関わり方の人の割合に違いは見られなかった。同時に、先行研究では明らかにされていなかったが、サークル活動においてネガティブな関わり方をしている人が半数近くいるということも明らかになった。この結果の考察については、第6章で述べる。

5-2 検証Ⅱ:クラスタごとの社会人基礎力に関する分散分析

【仮説】

・「集団への愛着」は、柔軟性、発信力、計画力において高い成長を示す。理由は、このクラスタは所属する集団のことが好きなフォロワーであると考えられ、フォロワーが身に付く能力と想定されるから。

・「集団への責任と行動」は、働きかけ力、実行力、主体性において高い成長を示す。理由は、このクラスタは所属する集団の中でリーダー層であると考えられ、リーダー層が身に付く能力と想定されるから。

・「集団への我慢と諦め」と「集団への嫌悪」は、どの項目においても成長度が低い。理由は、所属するサークルの活動を嫌々やっても成長は見込めないと考えられるから。

【結果】

クラスタ分析より「サークルへの態度」が4つに分類された。サークル活動への関わり方と、社会人基礎力の伸びの関係を明らかにするために、クラスタを因子として社会人基礎力の伸びの差について分散分析を行った。下記の表では、13項目の社会人基礎力の測定項目について有意確率を満たした項目だけを掲載した。

表6) クラスタごとの社会人基礎力の伸びに関する分散分析結果

Bonferroni (B)		多重比較		
従属変数	I	J	平均差 (I-J)	有意確率
主体性	集団への愛着	集団への我慢と諦め	1.11885*	.000
		集団への嫌悪	1.56476*	.000
	集団への責任と行動	集団への嫌悪	1.00702*	.000

柔軟性	集団への愛着	集団への我慢と諦め	. 56239*	. 034
		集団への嫌悪	. 68373*	. 001
実行力	集団への愛着	集団への我慢と諦め	1. 14997*	. 000
		集団への嫌悪	1. 49416*	. 000
	集団への責任と行動	集団への嫌悪	. 83678*	. 006
創造力	集団への愛着	集団への我慢と諦め	. 85838*	. 005
		集団への嫌悪	1. 13520*	. 000
説得力	集団への愛着	集団への責任と行動	. 85392*	. 003
		集団への我慢と諦め	1. 01503*	. 000
		集団への嫌悪	1. 02940*	. 000
働きかけ力	集団への愛着	集団への我慢と諦め	1. 20173*	. 000
		集団への嫌悪	1. 28214*	. 000
発信力	集団への愛着	集団への責任と行動	. 84408*	. 010
		集団への我慢と諦め	. 88297*	. 003
		集団への嫌悪	. 89320*	. 000
計画力	集団への愛着	集団への我慢と諦め	. 86263*	. 008
		集団への嫌悪	1. 23056*	. 000
規律性	集団への愛着	集団への我慢と諦め	. 84366*	. 032
		集団への嫌悪	. 86150*	. 008
プレゼンテーション力	集団への愛着	集団への嫌悪	. 89774*	. 002
職業理解力	集団への責任と行動	集団への嫌悪	1. 05043*	. 003
状況把握力	集団への愛着	集団への我慢と諦め	1. 03415*	. 000
		集団への嫌悪	1. 31924*	. 000
	集団への責任と行動	集団への嫌悪	. 70175*	. 040

*. 平均の差は 0.05 水準で有意です。

*. なお、左の項目（I）が上位、右の項目（J）が下位。

上記の表より、分析した 13 項目ある社会人基礎力のうち 12 項目で差がみられた。どの項目においても、所属する集団に対してプラスの感情を抱く「集団への愛着」と「集団への責任と行動」が高い成長を示し、所属する集団に対してマイナスの感情を抱く「集団への我慢と諦め」と「集団への嫌悪」が低い値の結果となった。

【仮説の検証】

「集団への愛着」が職業理解力以外の 11 項目で「集団への嫌悪」もしくは「集団への我慢」に比べて社会人基礎力の伸びが顕著であった。そして、説得力と発信力においては、「集

団への責任と行動」と比べても有意確率を満たす結果となった。「集団への責任と行動」は、職業理解力においては最も高い伸びを示した。しかし、それ以外の項目については「集団への愛着」の伸びに劣る結果となった。考えられる理由としては、所属する集団のことが好きな人は、集団のために行動することが多く、その結果社会人基礎力が自然に高まっていることなどが挙げられる。また、この分析はあくまでその集団にいる間に社会人基礎力がどの程度伸びたかを表すものであり、元から社会人基礎力の高い人は伸び幅が小さいということが想定される。これより、「集団への愛着が」もっとも社会人基礎力が最も高いというわけではない。しかし、教育的見地から考えると、能力の伸びは重要であり、「集団への愛着」が高い成長を示した今回の分析結果は注目すべき結果であるといえる。以上より、社会人基礎力の伸びについては「集団への愛着」および「集団への責任と行動」が高い値となった。

5-3 運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力に関する分散分析

さきほどは、「サークルへの態度」と因子として社会人基礎力の伸びについて分散分析を行った。つぎに、運動部、文化系サークル、運動系サークルを因子として同様に社会人基礎力の伸びについて分散分析をおこなう。これより、所属するサークル活動の様態によって社会人基礎力の伸びについて違いがあるかということが明らかになる。

分散分析の結果、13 項目の社会人基礎力の伸びについて有意確率を満たす違いはみられなかった。つまり、運動部、文化系サークル、運動系サークルに所属する人で比較しても差が出なかったということである。先行研究では、社会性の定着について運動部が優位であるという研究がみられたが、小樽商科大学の学生においては今回違いがみられなかった。

5-4 検証Ⅲ:同じクラスにおける分散分析

【「集団への愛着」における仮説】

- ・運動部は、規律性、状況把握力で高い成長を示す。理由は、運動部のフォロワー層は練習において、ルールを守って行動することが求められることが多いと考えられるからである。
- ・文化系サークルは、創造力、働きかけ力、プレゼンテーション力で高い成長を示す。理由は、文化系サークルは創作活動がメインとなるために、創造力が必要とされる場面が多いと考えられるからである。また、外部の人との接触も多いと想定され、働きかけ力やプレゼンテーション力も伸びるのではないかと考えられる。
- ・運動部は、実行力で高い成長を示す。理由は、運動系サークルは運動部に比べて強制力がないために、逆に実行力が必要とされる場面があるのではないかと考えたからである。

【「集団への愛着」の結果】

同じクラス（同じ態度）における運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力の伸びの差を明らかにするために分散分析を行った。下記の表は、運動部、文化系サークル、運動系サークルにおいて多重比較を行い、13 項目の社会人基礎力のうち有意確率を満

たした項目について掲載したものである。「サークルへの態度」、「サークルの様態の比較」の二つの視点が入っており本研究において、最も重要な分析である。

表7)「集団の愛着」における分散分析結果

【集団への愛着】 Bonferroni (B)

従属変数	I	J	平均差 (I-J)	有意確率
主体性	文化系サークル	運動系サークル	1.07407*	.022
柔軟性	文化系サークル	運動部	.85271	.050
実行力	文化系サークル	運動部	1.06891*	.011
		運動部	1.40741*	.009
創造力	文化系サークル	運動部	1.28252*	.019
説得力	文化系サークル	運動部	1.06202*	.011
働きかけ力	文化系サークル	運動部	.93023*	.047
情報収集力	文化系サークル	運動部	1.87166*	.003
プレゼンテーション力	文化系サークル	運動部	1.85185*	.000
		運動系サークル	1.81481*	.009

*. 平均の差は 0.05 水準で有意です。

a. クラスター = 集団への愛着

内訳（運動部 43 名、文化系サークル 19 名、運動系サークル 11 名）

【仮説の検証】

「集団への愛着」のクラスターにおいては、文化系サークルの社会人基礎力の伸びが 8 項目において、運動部や運動系サークルと比較して高い結果となった。柔軟性、実行力、創造力、説得力、働きかけ力、プレゼンテーション力においては、文化系サークルが運動部を上回った。また、主体性、プレゼンテーション力においては、文化系サークルが運動系サークルを上回った。つまりフォロワー層においては、運動部より、文化系サークルの方が社会人基礎力の伸びが大きいということである。

この結果は、大学生活における運動部の成長を支持する既存研究に対する新たな発見となった。また第 5 章 3 節の「サークルへの態度」という視点を除いた、運動部、文化系サークル、運動系サークルにおける社会人基礎力の伸びにおいては、有意確率を満たす違いは見られなかったことを踏まえると、この結果は「サークルへの態度」の視点が重要であることを証明している。このような結果となった要因については、第 6 章の考察における定性調査において明らかにする。

【「集団への責任と行動」における仮説】

- ・運動部は、主体性、実行力、説得力において高い成長を示す。理由は、運動部のリーダー層は、リーダーシップをより必要とされる場面が多いと想定されるからである。
- ・文化系サークルは、プレゼンテーション力、説得力において高い成長を示す。理由は、文化系サークルはメンバーが多いために、リーダー層はまとめるためにプレゼンテーション力も身に付くと考えられるからである。
- ・運動系サークルは、発信力において高い成長を示す。運動部と比較して自由度が高いため、リーダーは発信力が求められるのではないかと考えられるからである。

【「集団への責任と行動」の結果】

先ほどと同様に、同じクラスタ（同じ態度）における運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力の伸びの差を明らかにするために分散分析を行った。下記の表は、運動部、文化系サークル、運動系サークルにおいて多重比較を行い、13 項目の社会人基礎力のうち有意確率を満たした項目について掲載したものである。

表 8) 「集団への責任と行動」における分散分析結果

【集団への責任と行動】 Bonferroni (B)

従属変数	I	J	平均差 (I-J)	有意確率
主体性	運動部	文化系サークル	1.24058*	.049
柔軟性	運動部	文化系サークル	1.07246*	.041
実行力	運動部	文化系サークル	1.72174*	.007
働きかけ力	文化系サークル	運動部	1.13048*	.042
情報収集力	文化系サークル	運動部	1.43671*	.032
プレゼンテーション力	文化系サークル	運動部	1.32047*	.026

*. 平均の差は 0.05 水準で有意です。

a. クラスター = 集団への責任と行動

内訳（運動部 23 名、文化系サークル 13 名、運動系サークル 10 名）

【仮説の検証】

「集団への責任と行動」のクラスタにおいては、「集団への愛着」とは異なる結果が得られた。先ほどは文化系サークルが高い成長をみせていた主体性、柔軟性、実行力の 3 項目において運動部が文化系サークルを上回ったのである。その一方、働きかけ力、情報収集力、プレゼンテーション力の 3 項目においては文化系サークルが運動部を上回った。このクラスタはサークル活動におけるリーダー層である。この結果から、リーダー層において運動部と文化系サークルでは身につく社会人基礎力が違うということが明らかになった。それに

加えて、「集団への愛着」では、文化系サークルが主体性、柔軟性、実行力の伸びにおいて運動部を上回っていたので、このクラスタでは先ほどの結果との逆転現象が起きている。

このクラスタにおいても、運動部と文化系サークルにおいて差が出たため、「サークルへの態度」の視点が重要であることが引き続き証明された。

【「集団への我慢と諦め」の結果】

表 9) 集団への我慢と諦めにおける分散分析結果

従属変数			平均差 (I-J)	有意確率
規律性	運動部	文化系サークル	1.21429*	.043

*. 平均の差は 0.05 水準で有意です。

a. クラスター = 集団への我慢と諦め

内訳 (運動部 21 名、文化系サークル 10 名、運動系サークル 7 名)

「集団への我慢と諦め」「集団への嫌悪」の二つに関しては、ポジティブな関わり方をしているクラスタに比べて社会人基礎力の伸びが顕著に小さかったので仮説検証はせずに、有意確率を満たした項目だけ掲載するにとどめる。

「集団への我慢と諦め」においては、13 項目ある社会人基礎力のうち規律性だけで違いがみられた。運動部が文化系サークルに比べ規律性の伸びが大きい。ただし、所属するサークルに対して我慢をしている成員であるため、第 5 章 2 節で述べたように規律性の伸びは他のクラスタと比べる低いものとなっている。とはいえ、集団の中で我慢をしている人においては運動部が、一番規律性が伸びることがこの結果からわかる。これは、運動部はルールが厳しいという一般的なイメージとも合致する結果であると考えられる。

6章 考察

第5章2節の分析結果より、「サークルへの態度」によって社会人基礎力の伸びが変わることが明確となった。そして第5章4節の分析結果より、「同じサークルへの態度」で運動部、文化系サークル、運動系サークルの社会人基礎力の伸びを分散分析したところ、文化系サークルの社会人基礎力の伸びが大きく、これまでの研究結果を覆す結果が得られた。これは第5章3節の結果より、運動部、文化系サークル、運動系サークルにおいて社会人基礎力の伸びについて分散分析をしても違いが得られなかったことを考慮すると、「サークルへの態度」という視点が重要であることが再認識される。しかし、なぜサークルへの態度が同じクラスタにおいて分散分析を行うと、結果に違いが現れるのかということは明らかされていない。そこで、本研究では定性調査を行うことで第5章4節の結果に対する要因を明らかにすることを試みる。

定性調査では第5章4節で結果に違いがみられた、【集団への愛着における文化系サークル所属者】（以下Aと表記）、【集団への責任と行動における文化系サークル所属者】（以下Bと表記）、【集団への責任と行動における運動部所属者】（以下Cと表記）の3名にインタビューをおこなった。インタビューでは、最初に第5章に関する分析結果を伝え、その結果となった理由を尋ねていくという形式を取った。以下はその結果である。

表10) 定性調査の結果

【集団への愛着】において社会人基礎力の伸びが、文化系サークルが高い理由（A、B）

主体性	文化系サークルは顧問や指導者がいないことに加え、運動部に比べて活動内容も曖昧であるゆえに、リーダー層以外も自分たちで動く場面が多い。
柔軟性	文化系サークルはクリエイティビティな活動であり、毎年新しい演舞や音楽を作るにあたって、固定概念にとらわれないで考える場面が多い。モチベーションや目標について多様な人が多いから、対応性が求められる。
実行力	小道具の委託、チラシの作成印刷、会場のセッティング、協賛金集め、など運動部に比べて外部の人とかかわる場面が多い。
創造力	文化系サークルは、リーダー層以外の人についても、運営や組織の問題に関わるが多い。例えば、演舞の振りを決めるプロセスをみんなで話し合い解決策を考えたなど。
説得力	文化系サークルは、一般的に運動部に比べ人数が多いため、多様な人に伝わるように話す必要がある。
働きかけ力	文化系サークルは運動部に対して、練習に対してモチベーションが様々な人が混在しているので、働きかける必要性が強い。文化系サークルにおいては、リーダー層が呼び掛けるより、「集団への愛着」の成員が声を掛ける方が、人が集まるという意見もあった。

情報収集力	文化系の方が、演舞や音楽のトレンドや動向について知る必要がある。
プレゼンテーション力	文化系サークルの方が、仕事と組織が多いために、プレゼンテーションや意見を言う場面が多い。

【集団への責任と行動】において社会人基礎力の伸びが、運動部が高い理由（C）

主体性	運動部は、まとまって行動する必要性が強くリーダー層に求められる水準が高い。また、練習も自らがしっかりとこなし、見本をみせる必要がある。
柔軟性	運動部はメンバーを統制して、目標に向かわなければいけない。自分が居心地よくいるためだけではなく、違う方向を向いてる人それぞれに合わせて干渉して引っ張っていく必要がある。
実行力	運動部では、目標達成のために新しいことをやることに加え、決められたことを確実にこなす必要性が高く、マネジメント力が自然につくと考えられる。

インタビュー調査より、以上の意見を聞くことができた。「集団への愛着」においてどの項目にも共通していえるのが、文化系サークルは運動部と比較して活動の自由度が高いために、フォロワー層においても様々な役割を担う可能性が高いということである。また、文化系サークルは人数が多いという点も社会人基礎力の伸びに一定の影響を与えていると考えられる。つぎに運動部の視点で考えると、フォロワー層においては文化系サークルの社会人基礎力の伸びが大きいので、社会人基礎力を伸ばしたい人は積極的にリーダー層目指していく必要があると考えられる。

最後は、学校視点で考察を進める。第5章2、3、4節の結果より「どのサークル入るか」よりも「どのように関わるか」が重要であることが明確になった。しかし、小樽商科大学の大学生は半数近くの人が、所属するサークルに対してネガティブな関わり方をしていることが第5章1節よりわかっている。つまり半数近くの方は、サークル活動のミスマッチによって社会人基礎力の伸びが制限されているのである。大学1年生のサークル選びの方法やサークルを辞めた後の受け皿など、大学、体育会、文化会といった学校全体で工夫することで、小樽商科大学の大学生の社会人基礎力を引き上げられる可能性はあると考える。

7 章 本研究のまとめ

7-1 理論的貢献

本研究の理論的貢献は3つある。

一つ目は、「サークルへの態度」について先行研究ではサンプル数が24人と少なく、態度を分類するうえで偏りが予想されるが、本研究で再調査をおこない「サークルへの態度」を4つに分類したことである。

二つ目は、「集団への愛着」というクラスタにおいて、文化系サークルが柔軟性、実行力、創造力、説得力、働きかけ力、プレゼンテーション力という8つの社会人基礎力の伸びについて、運動部を上回る結果となったことである。また、主体性と実行力に関しても、文化系サークルが運動系サークルを上回る結果となった。文化系サークルが社会人基礎力といった社会性の成長に関する研究で運動部を上回ったという既存研究は見当たらず、この結果は理論的貢献が大きいと推測される。

三つめは、「集団への責任と行動」というクラスタにおいて、運動部が、主体性、柔軟性、実行力という3つの社会人基礎力の成長度合いで文化系サークルを上回る結果となったことである。これは、「集団への愛着」で得られた結果と真逆の結果である。また、働きかけ力、情報収集力、プレゼンテーション力においては文化系サークルが運動部を上回った。

これらの結果が得られたのは、「サークル活動を運動部、文化系サークル、運動系サークルに分割すること」と「サークルへの態度」を掛け合わせたからからである。この二つの要素を組み合わせることで考えて分析するというのも一つの理論的貢献ではないかと考える。

7-2 実務的貢献

本研究の実務的貢献は2つある。

一つ目は、第1章で述べた「どのようなサークル活動の中で」「どのような関わり方をしている人が」、「実際にどのような能力が伸びるか」については明らかにされたいのために、学生、ひいては企業の採用担当者思い込みがあるという点である。事実、第5章4節より、文化系サークルが運動部や運動系サークルに比べて社会人基礎力において大きく伸びているという結果が出た。私自身が、面接等において運動部が評価しがちであると感じたが、本研究の結果を踏まえると、面接等においても文化系サークルの成長度についてより注目されるべきではないかと考える。

二つ目は、第1章で述べた課外活動に対する学校側の評価が低いという点についてである。第5章4節より、文化系サークルの社会人基礎力の伸びや、運動部の社会人基礎力について明らかにしており、サークル活動に関する評価を再検討していただけないのではないかと考える。また、アンケートより、サークルに所属していて「集団への愛着」と「集団への責任と行動」にいる117名による、サークル活動を通じて社会人基礎力がどの程度伸び

たかという結果が分析したので下記に添付する。第4章1節で記述したように、その集団を通じてどの程度伸びたかについては、7段階評価で回答を得ている。もちろん、他の課外活動と比較しているわけではないので、比較してサークル活動による社会人基礎力の伸びを考えることはできないが、サークル活動による社会人基礎力の伸びは表より参照できると考える。

表 11) ポジティブな関わり方をしている大学生の社会人基礎力の伸びについての分散分析
記述統計

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	
						下限	上限
主体性	合計	119	6.0183	.96272	.10092	5.8178	6.2188
柔軟性	合計	119	5.7985	.96338	.10099	5.5979	5.9992
実行力	合計	119	5.6740	1.12982	.11844	5.4387	5.9093
創造力	合計	119	5.6040	1.27913	.13409	5.0376	5.8704
説得力	合計	119	5.4835	1.11805	.11720	5.2507	5.7164
働きかけ力	合計	119	5.3700	1.11050	.11641	5.1387	5.6012
発信力	合計	119	5.6769	1.23935	.12992	4.8188	5.9350
計画力	合計	119	5.2674	1.22949	.12889	5.0113	5.5235
規律性	合計	119	5.6960	.99337	.10413	5.4891	5.9029
情報収集力	合計	119	4.8535	1.52608	.15998	4.5357	5.1713
プレゼンテーション力	合計	119	4.6850	1.41627	.14847	4.3900	4.9799
職業理解力	合計	119	5.2784	1.37819	.14447	4.9914	5.5654
状況把握力	合計	119	5.7473	1.09357	.11464	5.5195	5.9750

表より、13 項目の社会人基礎力（1つは尺度の妥当性が満たされなかったために掲載していない）の伸びは 4.6～6.0 に収まった。評価の 5 はどちらかということ伸びた、評価の 6 は伸びたということを考慮すると、一定は社会人基礎力の伸びについて実感しているように考えられる。

7-3 本研究の限界と発展

本研究では、クラスタ分析をした後、クラスタ内における分散分析をおこなった。しかし、クラスタ内の比較となるとサンプルが分散されてしまい、サンプルの少なさが課題となった。今後の研究において、サークルへの態度をクラスタで分類し、クラスタ内の社会人基礎力やその他の関係性分析する場合には、十分なサンプルの確保が必要となる。

つぎに本研究は、サークル活動による社会人基礎力の伸びを分析するものであり、社会人基礎力がどの程度あるかということとはわからない。つまり、もともと社会人基礎力が高い人は、社会人基礎力の伸びは小さく評価されることが考えられる。しかし、教育観点から考えると、能力を引き延ばすことは非常にじゅうようであることから、本研究は一定の成果があると考ええる。

7-4 謝辞

本論文は、多くの方々からのご指導・ご助言を賜り、完成することが出来ました。また、小樽商科大学学生論文賞の参加にあたり、評価・コメントをしてくださった審査員の方々、発表を聞いていただいた学生の皆様に深く感謝を申し上げます。

最後に、お忙しい中アンケートにご回答頂いた小樽商科大学の学生の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

参考文献

- ・新井洋輔, 松井豊 (2003)「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」(筑波大学心理学研究 26 巻)
- ・経済産業省 (2006)「社会人基礎力に関する研究会, 中間取りまとめ」
- ・西道実 (2011)「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」(ブール学院大学研究紀要 第 51 号)
- ・高田治樹 (2015)「大学生サークル集団研究の意義と展開」(青年心理学研究 27 巻)
- ・高田治樹, 松井豊 (2012)「大学生のサークル集団に関する研究動向—新井・松井 (2003) の研究動向からの変化—」(筑波大学心理学研究 43 巻)
- ・高田治樹 (2014)「大学生のサークル集団への態度の探索的検討—否定的態度を含めた態度パターンの分類—」(青年心理学研究 26 巻)
- ・高田治樹 (2015)「大学生サークル集団への態度変容過程の検討」(筑波大学)
- ・橘木俊詔 (2012)「スポーツの世界は学歴社会」(PHP 新書)
- ・豊田義博 (2011)「キャンパスライフに埋め込まれた学習—何が, 社会人としての適応をもたらすのか?—」(リクルート Works Review 6 巻)
- ・日本私立大学連盟 (2007)「大学生が人間(ひと)として成長するために—正課外教育の重要性の再認識—」(正課外教育研究分科会)
- ・三保紀裕・清水知秋 (2013)「大学での学び・正課外活動と社会人基礎力との関係性」(関西大学社会学部紀要 44 巻)
- ・三保紀裕・清水和秋 (2011)「大学進学理由と大学での学習観の測定—尺度の構成を中心として—」(キャリア教育研究 29 巻)
- ・三保紀裕・清水和秋 (2012)「現代青年の進路選択」(青年心理学)
- ・向井暁 (2013)「大学生の正課外活動と社会人基礎力—幼児・児童教育関連学部卒業生において—」(第 55 回日本教育心理学会総会発表論文集)
- ・茂里一絃 (2000)「人間基礎力と課外活動の充実」(広島大学高等教育研究開発センター)

質問1 あてはまるものにマルを付けてください。

あなたの学年は？	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院生
あなたの性別は？	男性	女性			
あなたの学科は？	経済学科	商学科	企業法	社会情報	未定
あなたが所属していて(引退も含む)、最も重きを置いているサークルまたは部活はどれですか？	体育会の部活	文化系のサークル	運動系のサークル	無所属（無所属の方は質問3へ）	
サークルまたは部活の活動頻度は？	週1～2	週3～4	週5～6	週7	その他
サークルまたは部活での役職は？(特にない場合はマルを付けない)	主将（キャプテン）	副将（副キャプテン）	主務	会計	マネージャー

質問2 あなたが最も重きをおいているサークルまたは部活において（引退した場合は以前所属していたもの）最も当てはまると思うところにマルを付けてください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかという当てはまらない	どちらかという当てはまらない	どちらかという当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる
その集団のことをもっとよく知りたいと思っている							
その集団から離れるのが嫌である							
その集団の人間関係が大事だと思っている							
その集団にいて居心地がよいと感じている							
その集団のメンバーと同じ気持ちであると感じている							
その集団に対して満足している							
その集団の活動を楽しみにしている							
その集団にいと安心する							
その集団のメンバーと仲良くなりたいと思っている							
その集団からよくしてもらっている							
その集団の在り方を受け入れている							
その集団の伝統を誇りに思っている							
その集団を生活の一部と考えている							
その集団の雰囲気をよくしたいと思う							
その集団の良さをメンバー全員に知ってほしいと思う							

その集団にできる限り参加しようとしている							
その集団の習慣に従うことは当然であると思う							
その集団のやり方が自分に合っている							
その集団がさらに発展するように自ら動いている							
その集団で率先して行動するように心がけている							
その集団を変える機会を伺っている							
その集団をよくする責任が自分にはあると思う							
その集団の責任ある仕事をしたいと思う							
その集団の体制を確立したいと感じている							
その集団のメンバーのモチベーションを上げたいと思う							
その集団で自分自身の役割を果たすべきだと思う							
その集団で全体を見渡して行動をしている							
その集団では我慢をしようと思う							
その集団で自分の意見を言いつらい							
その集団を誰かが変えることを期待している							
その集団を他の人に良くしてほしいと思う							
その集団に不満を感じることに慣れた							
その集団を変えたほうがいいと思うが、行動は控えている							
その集団の関わり方に不安を感じる							
その集団にいる時間が無駄だと感じている							
その集団から離れたいと考えている							
その集団に縛られているのが嫌だと思っている							
その集団にいても自分のやりたいことができないと思う							
その集団のことを諦めている							
その集団の他の人と価値観の違いを感じている							
その集団に居場所がないように感じている							
その集団のメンバーとうわべだけで関わっている							
その集団の活動に参加することが気乗りしない							
その集団の伝統を守る雰囲気を嫌だと思っている							
その集団にいてもしょうがないと感じる							
その集団をまだよく理解できていない							
その集団に馴染めていないように思っている							
その集団に対して気持ちが向いていない							
その集団に関してわからないことが多い							
その集団は自分にとって重要ではない							
その集団ではみんなの意見に合わせればいいと考えている							

その集団では目立たないようにしている							
その集団で意見を言う必要がないと思っている							
その集団では、でしゃばらないようにしている							
その集団の流れに任せればいいと感じる							
その集団では人から言われたことだけをしている							
その集団で傍観していることが多い							
その集団で嫌われないように気を付けている							
その集団で人から非難されるのが怖いと思う							
その集団の雰囲気が悪くなることはしないようにしている							
その集団でいざこざが起こってしまうのが嫌である							
その集団の飲み会に参加するようにしている							
その集団は団体競技である							
その集団は競技性が高い							
その集団は大会で結果を残すことを重要視している							
その集団は楽しさを重要視している							
その集団において下級生の数は多い							
その集団において同期の数は多い							
その集団において同期の仲は良い							
その集団では先輩との仲が良い							
その集団では後輩との仲が良い							
その集団は男性の方が多い							

質問3 あなたはその集団に入ってから今に至るまでに（無所属の人は大学全般で）能力がどの程度伸びたと感じるかを、それぞれ最も当てはまるものにマルを付けてください。（7段階評価で）

	全く 当て はま らな い			どち らと も言 えな い			非常 に当 ては まる
指示を待つだけではなく、自らやることを見つけて積極的に取り組む力							
自分の果たすべき役割と責任を自覚し、積極的に取り組む力							
自分の個性や興味関心にもとづいて、目の前の課題に取り組む力							
自分の考えに固執せず、異なる考えや立場も尊重する力							
既存のやり方やマニュアルに囚われない考え方を受け入れる力							
固定概念にとらわれないで、相手の立場や意見を理解する力							
自ら目標を設定し、粘り強く行動する力							

提案するだけではなく、自ら目の前の対象を動かす力							
失敗を恐れず、行動に移す力							
既存の発想にとらわれず、解決方法を工夫して考える力							
未知の分野まで思考を広げることで、新しい解決方法を導き出す力							
あらゆる可能性を再検討することで解決方法を再発見する力							
自分の言いたいことを、わかりやすく、効果的に伝える力							
自分の話に信頼感をもってもらえるように話せる力							
相手の立場に配慮しながら、自分の主張を伝える力							
目標を達成するために周りの人に呼び掛けて周囲を動かす力							
人を巻き込んで提案する力							
立場や意見の異なる人に働きかけて、動かす力							
話しやすい雰囲気を作って、相手の意見を引き出す力							
相手の言動を観察し、意見や主張を正確に聞き取る力							
自分がわからないことを聞き流さずに、質問して確認する力							
自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力							
相手にとって良くないことでも自分の意見を誠実に伝える力							
仲間内にしか伝わらない言葉で話したりせず、誰もが理解できるように話す力							
目標を達成するための手順や方法について優先順位を決める力							
将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解して準備する力							
課題を解決する複数のプロセスを明確にし、最高のプランを立案する力							
集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力							
状況に応じて、自らの発言や行動を適切に律する力							
他者と共有する「空気」を読んで、自分の行動を修正できる力							
自分に必要な情報を得るために、あらゆるメディアを活用する力							
自分に必要な情報や資料を的確に探し出す力							
得られた情報を、多面的・多角的に理解する力							
限られた時間の中で、情報や主張を、わかりやすく聞き手に伝える力							
調べたことを伝える際に効果的な手段やメディアを用いる力							
情報を伝えるために、必要な創意工夫を加える力							
学んだことや体験したことを職業や生活とつなげて考える力							
日々の体験を通して、社会の規範やマナーを理解する力							
周りの人たちの仕事から、働く意義や大切さを理解する力							
グループ内で自分がどんな役割をすればよいかを理解する力							
お互いの個性や能力を理解し、それが発揮できるような関係を築く力							
周囲の人々や物事との関係を理解するために積極的に働きかける力							

ご協力ありがとうございました！！